慎　独

勤勉、慎み深さ、信義、礼節、これらは全て兵の四徳である。つまずいて倒れる間のような、ほんの一瞬の間においても大事（人として大切にすべき事）を忘れず、人が陥りそうな危い事に直面する時こそ、兵の大事を知らなければならない。大事とは「人の心」である。弓馬武芸の家に生まれて、兵の名を失ってはならないと思うのであれば、毎朝寅の時（午前四～六時頃）に起きて、我が身を浄め、衣服を替え、諸天に祈りの誠を捧げ、神明を崇敬し、信じて疑ってはならない。誠めを細かい点にまでゆきわたって実践し、邪を除き、愚にならず、痴にならず、心は均衡を保っているか、道は通じているか塞がっているか、これらを独りで知り、独りで思えば、これによって知識がはっきりとよくわかってくるのである。立派な人とつまらぬ人と、智に至ると愚に至るとの違いは、その根源を思えば、ただ「独り慎むか、慎まないか」の違いである。独りであることを慎んで自ら心に欺くことがなければ、礼節や信義もまたその身から外れることはあり得ない。天地の神明が物体へとのり移り、智もまた偉大な霊力に導かれて発揮されるものである。

およそ天の道を知らない者は、地の道、人の道についてもわかっていない者である。天道というのは、陰陽が交互に推し移って寒さ暑さをもたらし、人の生と死と栄誉と屈辱と、これらは全て天道から来るのであって、人のなす業でなない、ということである。この心をよく自分のものとした時、諸法（宇宙の一切の現象）を疑うことが無く、この道にも疑いが無くなる。疑いがないときには、すなわち私がない。私がないときには、すなわち人の心を知る。人の心を知るときは、すなわち物事がはっきりとよくわかってくる。あらゆる事がはっきりとわかっていることを「良智」という。そうであれば、兵の恥というものは、ものごとを知らないがために義理というものがわからず、人から信用されずにうまいことを言って相手をだますことが多く、相手に敬意を払わないことで身を亡ぼし、勇気が無いために家業に励まないことである。これらを「四恥」という。これらのことをよく分別して、常に心を忽（ゆるが）せにしてはならない。

（注）忽せ：大事なこととは考えずに、いいかげんにしておくこと